BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No・50
2011・3・23

〒102－0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL&fax　03－3221－0019　E-mail info@hosojin.com
代表幹事　今野勉　編集担当　伊藤雅浩(会報編集長)、鈴木典之、松尾羊一　事務局　佐藤真美子

「自由」にしたら「公正」がなくなった

代表幹事・今野　勉

報道番組における政治的公正の規則を緩和したらどうなるか。

つまり、どんな政治的立場に立って番組を作っても自由である、となったら、放送局や視聴者はどう変化するか、ということ。

規制緩和（1987）後のアメリカ放送界の現状について話を聞く機会があった。（放送文化基金助成金贈呈式で。講演者は文教大准教授前嶋和弘氏）

現在、アメリカの主なラジオ局・テレビ局は、大きくコンサバティブ（保守派、政党的には共和党派）とリベラル（自由派、政党的には共和党派）に二分されているという。それぞれの局の中の各番組のイデオロギーは、濃淡、硬軟さまざまであるのはとうぜんとしても、局の軸足が左右どちらにあるかは歴然としているという。

それに対して、視聴者はどういう対応を示しているか。各局を聞き比べ、見比べているか、というとそうではないようだ。

保守的視聴者は保守派のチャンネルを選び、リベラルな視聴者はリベラルなチャンネルを選んでいる。つまり、イデオロギー別に視聴層が固定化する現象が起きているのだ。

これは、インターネットのフェイスブックなどにみられるソシアル・グループ化と同じ現象ではないか、と私は思った。

放送の面白さの第一義は、予想もしなかった未知の世界と遭遇することにあるはずが、この現状が示しているのは、放送が想定内の報道に終始しているということである。

規制を緩和して自由にしたら、固定化がもたらされたというのは、何たる皮肉であろうか。

前嶋准教授によれば、政治的公平の規制が緩和されたあとの各放送局の公平さを監視する団体が続々と生まれているということであるが、その監視団自体が、イデオロギー的立場に立って相手局を監視しているということも起きていて、この互いの監視、告発が、現在のアメリカ社会の分極化、対立化、抗争化の背景にあるようだ。

自由が対立と抗争を生むというのは、皮肉というよりは悲劇である。

監視という言葉は、私にはあまり好ましいものとは思えない。マス・メディアの役割のひとつに、権力に対する監視というのがある。確かにそうなのだろうが、監視という言葉には、人間的な視線が感じられない。

話は少し変わる。監視ではなく、観測というか測定の話である。

ある特定の集団を長年にわたって観測する疫学調査を「コホート研究」というらしい。（毎日新聞論説委員青野由利氏の記事による）

この1月から環境省によるコホート研究「エコチル調査」が始まった。エコはエコロジー、チルはチルドレン。「子どもの健康と環境に関する全国調査」である。年間で10万組の親子を調査する大計画である。

「エコチル」と聞いて、私はすぐ「テレチル」を思いうかべた。子どもを取りまく環境のうち、食物などによる身体的影響と並んで精神的（情操的）影響が大きいのはテレビではないのか。生まれてすぐにテレビの画面と音声にさらされて生きていく子供は、そこからどのような精神的影響を受けるのか、という「テレチル調査」も重要なはずだ、という思いは、つねづね感じていた。

青野論説委員によると「エコチル」とは別に、2004年から、子供の心の発達に焦点をあてた大規模調査が始まったのだが、準備不足で現在、頓挫しているという。

この調査に、子供の心の発達にテレビがどうかかわっているか、の調査項目が入っているのかどうか、わからない。入っていないのなら、頓挫を幸いに、ぜひ入れてもらいたいものだ。

監視ではなく観測でテレビがよくなるのなら、それに越したことはない。

東北関東大震災の被災者の皆様へ心からお見舞いを申し上げます

なお、この会報の記事の殆どは震災の前に書かれています。

テレビの季節、放送人の季節

「放送人グランプリ」投票のお願い

「放送人グランプリ」は、選考の対象期間が4月～3月である。いわゆる会計年度だ。こうなったのは、会員が集まる5月の総会の席で贈賞の発表をしようとしたためだろう。

この時期になると去年の作品の評価は一応定まったような印象がある。このタイミングで出される「放送人グランプリ」は、制作者たちにどう受け止められるのか。幸い芸術祭、芸術選奨などで高い評価を受け、社内表彰や仲間内の賛辞が降り注いで、祝賀会もやった、というラッキーな制作者は、ようやく高ぶりがさめて、さて次の仕事と思っているところかもしれない。

一方で、ようやく実現した企画で久々の力作、自信作を送り出した、と思ったが、いま一歩華やかさに欠け、評価の声はあるものの賞には恵まれず、社内の冷たい視線に唇を噛んでいる、そういう制作者もいるだろう。

番組に運不運は付き物だ。同じ努力をしたからといって同じ成果が得られるとは限らない。偶然出会った材料が苦労して発掘した素材よりも大きな成果をもたらすこともある。

「放送人グランプリ」はユニークな賞でありたい、というのが、この顕彰を設立したときからの理想である。しかし選考が作品中心の成果主義になると、他の賞との差別化は難しい。かといって作品を並べておいて、「1番じゃなければダメなんですか。2番じゃダメなんですか」といって一番を避けることに決めるのも変だ。できれば他の賞では取り上げることはないだろうと思われる地味で、滋味あふれるもの、そういうものを発掘したい

心がけたいのはこの賞が会員の「放送に対する愛情」の表現でありたい、ということだ。放送がどんな状況下でも「倦まずたゆまず」「臆せず屈せず」、自らの質を高める努力をしてほしい。そういう願いの表現としての「放送人グランプリ」でありたい。

前号でもお願いしたが、選考委員会の指針はあくまでも会員の投票である。たとえ得票数の少ない人物でも、会員の目が指し示すところには必ず意味がある、というのがここ数年の経験から学んだことである。

この人には「素晴らしかったですよ」とひと声掛けておきたい。この人には「その線で頑張り続けてください」と励ましたい。そんな制作者に対する気持ちを込めて、会員の皆さんの投票を切にお願いいたしたい。

堀川とんこう

2010年度の放送番組総まくり座談会

会員が「放送グランプリ」のノミネート投票をするための参考にと昨年も掲載した座談会の記事を今年も掲載します。番組紹介が目的で、話題をよんだ番組、制作者の周辺を紹介、推薦の目安として下さい。

【ドラマ】

A まず、新聞、ネットその他話題になっているところからいくつか挙げよう。昨年は奈良遷都千三百年記念として、池端俊策さんが古代史スペシャル三部作を担当し、その最期が「**大仏開眼**」。4月3日、10日放送。放送文化基金賞に入っている。主演は吉岡秀隆。

B NHKに大人向けのドラマ枠があり、3月～5月に放送した「**八日目の蝉**」。前夫との間にできた赤ん坊をつれて生きて行くロードムービー調のドラマ。壇れいが綺麗だった。壇れいは宝塚出身、かつての八千草薫を思わせる。原作は角田光代。本年度ATP大賞受賞。

C 日テレで4月から放送した「**MOTHER**」。松雪泰子の主演で、いくつか賞をとった。これも赤ん坊誘拐の話だ。

D ほかに連続ドラマの話題作としては「日曜劇場」の「**新参者**」。ほとんど人形町のオール・ロケのドラマで手法は珍しい。ホン、台詞が面白かった。

A サスペンスや謎解きの面白さではなく、下町人情を狙った感じかな。

B いや、犯人はなかなかわからなかった。面白い作りだったと思う。

C 三谷幸喜作のフジテレビ60周年記念ドラマ「**わが家の歴史**」。博多に住んでいる一家が東京に移り住んで、一家の歴史に昭和史がからむ作り方だった。主役は佐藤浩市、そして西田敏行が父親。エノケンや政治家やいろんな人物が登場して昭和史のエピソードを挿入。著名人が絡まる進行がホームドラマにうまくインサートされていた。

D 朝ドラの久々のヒット作「**ゲゲゲの女房**」は下町ではなく昭和30年代の府中が舞台だ。今はすっかり都市化したがあの頃は田舎だった。

A 境港から出て来て、妖怪もののマンガを描いている男とその女房の話だが、主役の女が専業主婦なのが珍しい。

B 昔風に言えば出職に対する居職（いじょく）で、女房は弟子や小僧がいるうちの中を切り盛りするわけだ。

C そして、最近はあまり聞かなくなった貧乏話だ。障子が破れていかにも赤貧洗うがごとしの貧乏感による人肌の幸せか。実感的な貧乏感がよく出ている。

D 「**竜馬伝**」は高く買いたい。NHK大河ドラマは生まれたときからずっとNHK歌舞伎だった。初めてそれを脱した作品だ。海老蔵、当時の新之助の「宮本武蔵」がその感じがあったが、作品としては失敗した。「竜馬伝」は大河ドラマの流れ、作り方の枠を破った。

A NHKの中でも議論があり、抵抗があっただろう。見ている人も「これは大河ドラマじゃない」と思ったんじゃないか。

B ディレクターは「大河ドラマを意識

して作ってはいなかった」と言っている。

C　それに比べると今度の「**江**」は脚本はトンでいるが撮り方は古くて、テレビ東京の時代劇を見ているのかと思った。

D　「江」はちょっとひどい。織田信長に会い、明智光秀に会い、しかも織田信長に会ったときは「やったぁ！」と言うのだから。

A　歴史に忠実でなくてはならないとは言わないが、歴史を冒涜してはいけない。戦国を生きた人間を直接現代に生きる人間のように描くのは無理だ。現代語を使ってもいいが、「やったぁ！」まではね。

B　「竜馬伝」に戻るが、土佐の竜馬の実家のシーンをはじめやたらに猫が啼く。猫を正面からちゃんと撮るのでなく、なんとなく画面に入ってきていて啼いている。捨てカットが生きている。

C　歴史に乗り遅れた山内容堂、ほとんど酔っ払いの鯨酔候の近藤正臣がいい。

D　大友啓史の登場の仕方が「ハゲタカ」であり、あの画の作り方、あのＮＨＫの時代劇らしからぬカメラワークやカット割りはまさに映像監督だ。

A　スピルバーグは若い頃「激突」を撮ったが、あの頃のハリウッド・ニューウエーブの映画を「竜馬伝」の大友も学んできたように思う。

B　竜馬の世界認識、国家認識は破天荒なもので、それまでなかったものではあるのだが、あそこまで徹底してネーション・ステーツの認識を持っていたのか。

C　歴史学者飛鳥井雅通の「坂本竜馬」によれば、それまで「くに」といえば「藩」のことで、竜馬は「みくに（皇国）」という言葉で日本国の概念を説き、広げたと、豊富な資料を駆使して述べている。

D　「土佐の隣国はアメリカだ、と言った」とも司馬遼太郎が書いている。

A　大友氏は手法も含め、若いエネルギーのぶつかりあいが明治維新の歴史を動かしていたことを意図した以上に描いてしまったと思う。

B　維新の原動力、若いエネルギーを組織したのは中岡慎太郎だ。それと薩摩の小松帯刀、そして竜馬の３人なんだ。竜馬は実は使い走りだが、彼にスポットを当てると話は面白い。彼が会った人脈は松平春嶽、勝海舟、西郷隆盛などなど豊富だから、それを辿れば面白くなる。

C　典型的なフィクサー、ネゴシエーターとして竜馬像をつくっている。

D　次は「**帰国**」。ＴＢＳが毎年終戦記念で作ってきたドラマのひとつで、倉本聡が棟田博の原作を脚色した。

A　昭和30年に発表され、映画にもなった「サイパンから来た列車」が原作。ニッポン放送が以前ラジオドラマでやったこともある。

B　富良野塾の塾生が出演して赤坂の劇場でやった舞台を見たが、テレビドラマも無名の新人がやる方がよかった。たけしが石坂浩二を殺すくだりはやはり「たけしが」になってしまう。

　棟田氏の原作を大幅に変えて、「銀河鉄道の夜」のように作るとか、大胆な発想が必要だったかもしれない。

C　「**十五歳の志願兵**」は大森寿美男のホン。旧制愛知一中の物語だ。少年の池松壮亮がよかった。芸術祭優秀賞を受賞している。

D　少年二人の描き方が実に自然だ。ヴェルレーヌの詩を愛したり、祖国に殉じる志とか、当時の文学少年と軍国少年、その両方があって青春なのだ。戦時中のエリート校の雰囲気がよく出ていた。

A　桃井かおりが母親役の「花へんろ」で生徒に志願させるくだりがある。配属将校が生徒たちに「目をつぶれ」と命じ、志願する者に挙手を命じる。生徒たちは催眠術にかかったように次々に手を挙げる。桃井かおりは激怒して職員室へ怒鳴り込む。早坂暁の体験だという。

B　数日前、ドキュメンタリー「**日本人は何故戦争へと向かったのか**」で「〝熱狂〟はこうして生まれた」をやっていたが、「十五歳の志願兵」は〝熱狂〟が生まれる過程をうまく縮尺で見せていた。

C　川野秀昭という演出家は比較的若い。名古屋の放送局には伝統的にドラマを作る力があって、ＮＨＫだけでなく民放もいい作品を作ってきた。

D　「**なぜ君は絶望と闘えたのか**」。２０１０年の代表作と言っていい作品だ。ＷＯＷＯＷには他の局にはない自由な気風があり、フリー演出家が意欲的に作っている。「空飛ぶタイヤ」がそうだが、シビアな社会派ドラマを連打している。

A　裁判中の事件をこんなドラマにしていいのかという意見もあるが、そんな教条的な意見を乗り越えるだけの、考えられたバランス感覚も主張もある作品だ。

B　この事件は非常に微妙で糾弾する被害者の側にも弁護の側にも立つのは難しい。マスコミの記者が自分の埒内を心得ていて、主人公との交流を可能にし、ドラマの後味をよくしている。

C　あの新聞記者が原作者だ。その意味では演出力が凄い。石橋冠はこれを撮り終わったとき「いやなもの撮っちゃった」と言った。石橋さんとしては視聴者どう見てくれるか心配でならなかったらしい。

D　裁判員制度のより良い運営のために是非参考にして欲しい作品だ。

A　芸術祭参加「**堺の中の中学校**」は清弘誠の卒業ドラマだ。松本の刑務所で教育を受けていない受刑者が中学教育を受ける話だ。

B　ネタは報道の巡田忠彦、ちょっと前までソウル特派員をやっていた男で、報道と演出の連携という珍しいケースだ。

C　「**99年の愛**」は橋田壽賀子ドラマで３部作。ＴＢＳ開局60周年記念番組だ。橋田さんらしい力作感のあるドラマで視聴率はよかった。前にＮＨＫでやったブラジルの話に似ている。

D　岸恵子の若いこと。

A　説明調の橋田節はやはり気になったが、演出はがんばっていた。

B　２世の雪の中の戦闘シーンがよかったが、あれはアメリカサイドのスタッフによる映像だろう。

C　「**坂の上の雲・第２部**」広瀬武夫。広瀬役の藤本隆宏の人気がすごい。身長１８０センチ以上。元オリンピック水泳選手。立っているだけでカッコいい。

D　小学唱歌「轟く砲音（つつおと）飛び来る弾丸　杉野はいずこ　杉野はいずや」を思い出した。

A　ＣＧを含めお金のかかった映像だ。

B　西村与志木氏が芸術選奨の大賞を受賞している。

C　クレジットに島田謹二の名がある。司馬遼太郎の原作にはロシアでの広瀬の記述がほとんどなくドラマは島田の有名な本「ロシアにおける広瀬武夫」によっているのだろう。

D　野澤尚が自殺した後、制作顧問団が

出来、演出の佐藤幹夫氏も入り、いろいろ気をつかって番組はできた。政治的にはどちらに偏っても危ない。第3部は日露戦争、乃木希典だ。いままでの日露戦争神話をぶっこわすようなものを期待したいのだが。

A 司馬遼太郎が「テレビでやりたくない」と言った気持ちはわかる。

B 人によっては「あれは国家主義礼賛だろう」と一刀両断だ。

C クレジットには〝「坂の上の雲」より〟とあるのだから、もっといろんなエピソードを入れて明治という時代を描けばいい、と思う。例えば、徳富蘇峰は超右翼の国家主義者だが、弟の蘆花はロシアヘトルストイに会いに行く。そして戦争が終わると有名な反戦の文章を雑誌に発表する。万朝報、与謝野晶子、内村鑑三など、当時の知識人と反戦の問題をどこかで突っ込めないものか。

D このドラマの正岡子規と「竜馬伝」の岩崎弥太郎を演じた香川照之を昨年の男優第1位に挙げておきたい。

A 三菱から「弥太郎はあんなに汚くない」とクレームが来た。

B しかし、昭和恐慌のとき高知県が三菱に救済を依頼したらにべもなく断られたと今も高知には反三菱の感情が強く、高知県には今も三菱銀行がない。

C 月曜スペシャル「**私は屈しない～特捜検察と闘った女性官僚と家族の465日**」。村木厚子さんの話だが、司法の問題というよりけなげなホームドラマ調で評価が分かれた。

D 和田勉追悼の「天城越え」は、ドラマがどうだ、ではなくて、和田勉を放送人グランプリ特別賞にどう扱おうかと思って挙げてみた。

A 和田勉の代表作は「天城越え」より『阿修羅』だろう。

B 「近松3部作」がいい。太地喜和子を見たかった。

C 「ザ・商社」、「けものみち」「堂々たる打算」「勇者は語らず」、山崎努主演の「価格破壊」、まだまだあるなあ。

D TBSの「**総理の密約**」。若泉敬がややセンチメンタルに描かれている。三上博はよく似ているが。

A 核密約が何故ぎりぎりの選択だったかということが描かれていない。そのため、若泉が苦悩し、沖縄へ贖罪の旅を続ける過程こそがドラマの核なのに。

B 。NHKの土曜ドラマへ行こう。「**鉄の骨**」はゼネコンの内幕もので、談合はよく描かれていたが、主役の小池徹平はルックスが少年っぽい。

C 「**セカンドバージン**」。大石静の脚本。女性に大うけのドラマだ。

D アラフォーの間での話題作で、週刊誌はこのドラマから「女性は結婚しても自由であるべきだ」との論を展開した。

A NHKが民放顔負けのセックス描写をやったと評判になった。タイトルもNHKには珍しく直球だ。

B これで大石静は女性放送者懇談会の賞を貰った。

C テレビ東京の「**モリのアサガオ**」は「塀の中…」に似たドラマだ。ARATAの好演が光った死刑囚の話。

D フジの「**フリーター、家を買う**」は主役が嵐の二宮和也。就活心理をえぐったホンがいい。ギャラクシーの月間賞に入ったし、視聴率もよかった。

A NHK大阪の「**大阪ラブ&ソウル**」。これは映画監督林海象のホン。「再生の町」を作った青木信也氏の作品で、ドキュメンタリーで培った方法をオリジナルなドラマにした第2作だ。

B 10年くらい前、大阪で「李くんの明日」というドラマがあった。教員免状を持っているが在日のため正規の学校の教師になれず予備校の教師をしている若者の話だ。新谷英子が対馬海峡を渡ってきた1世。NHK大阪は在日をめぐるドラマを作り続けてきたのだ。

C 岸辺一徳が在日2世を好演。ミャンマーの女性ネイチーは本当の難民でしろうと。たどたどしい日本語で、恋人の家族と面会し、紹介されたそれぞれの顔を見て、確認するように「オカアサン、オニイサン、オネエサン、オバアチャン」と声に出して言うシーンには思わず不覚の涙だった。

D 最後のスタッフのクレジットロールがみんなミャンマーの文字だ。

A 「**心の糸**」の龍居由佳里さんはベテランの古い脚本家で、久しぶりの作品。松雪泰子とその息子の恋人が聾唖者。手話を訳したスーパーがずっと入ってくる。

B 非常に繊細なデリケートなドラマだ。「風林火山」「白洲次郎」の東山充裕が演出。

C 「**私の初めて創ったドラマ**」はNHKの新しい試みだ。1本25分。NHKの編成局ソフト開発部が主導して2年前から始めたもので、NHK内外のドラマ演出経験のない人に脚本応募を求め、選ばれた人自身が演出する。過去2年間に毎年3作、計6作が放送された。

制作プロダクションの若いドキュメンタリーPD、編集マン、CF制作に携わるカメラマン、劇団主宰者、俳優と多士済済。みじみずしい感性を感じる作品が多い。

D 「**万葉ラブストーリー**」は万葉集の恋歌をもとに視聴者が書いた3編のラブストーリーをドラマ化した。

A 「**続・遠野物語**」は「遠野物語」という番組の続編ではなく、遠野物語のついての番組といった意味のタイトルだ。近衛はなさんの脚本で、妖怪や河童など遠野物語の中の3つの物語をつなぐ。

B 最近で注目されたのは「**迷子**」。前田司郎脚本、中島由貴演出。中国系らしい国籍不明の迷子の老婆をめぐって若者言葉が縦横に飛び交う。

C ドラマとドキュメンタリーの枠を超えていて、カメラがいい。絶対にクローズアップで撮らない。道路の向こうから「あれまだあの人が…」という視線で追っている。

D 匿名化した現代社会に善意の顕在化を訴えた作品。

A 面白いのだがとりつく島がない、と思いながら番組の中に迷い込んでしまう。

B 「**TAROの塔**」が面白い。大森寿美男のホン。予告の番組宣伝で「芸術はバクハツだ！」と叫んでいるのを見て絶望したが、ホンバンはまるで違う。

C 昨年辻本昌平氏が受賞した「まいど238号」を演出した梛川善郎の演出。太郎の両親の描き方は面白い。

D 日テレの「**曲げられない女**」は菅野美穂が司法試験に何度も落ちてめげずに頑張るドラマ。同じく日テレの「**木下部長とボク**」は吉本のユニット。「ケイタイ大喜利」の田中寿一がやってる。「**日本人の知らない日本語**」はYTV制作。いろ

んな外国人がいる日本語学校のドラマで日本人論のドラマになっている。

A　**「ニセ医者と呼ばれて～沖縄・最後の医介輔」**はＹＴＶ制作。堺雅人が気の弱そうな医介輔を好演。

B　**「うぬぼれ刑事」**はＴＢＳの磯山晶、宮藤官九郎のコンビ、刑事は長瀬智也。逮捕状と婚姻届でせまるという官九郎らしいドラマ。

C　**「獣医ドリトル」**。これは視聴率はよくなかったが、ペット・ブーム批判は説得力があった。

D　**「筆談ホステス」**はＭＢＳ制作。聾唖者の娘が不良からホステスになり、筆談で人気者になるドラマ。

A　**「ＢＵＮＧＯ・日本文学シネマ」**は深夜の帯ドラマ。毎回読み切りで日本文学の短編の名作をドラマにしている。

B　ＣＢＣ創立60周年記念**「旅する夫婦」**は市川森一の脚本。伊藤蘭、岸辺一徳が巧みな演技でみせた。

C　あと、番組名だけあげておこう。フジテレビは**「医龍」**、ヤングシナリオ大賞**「輪廻の雨」**。テレビ朝日が気象キャスター倉嶋厚をめぐる一家の**「やまない雨はない」**、新人シナリオ大賞**「臨月の娘」**、田村正和の**「その男、大石内蔵助」**、28回を重ねた渡瀬恒彦の**「タクシードライバー推理日誌」**。

【ドキュメンタリー】

A　では、ドキュメンタリー。まず、ＥＴＶ特集**「枯葉剤の傷痕を見つめて」**。ベトナムの枯葉剤の後遺症で足がない人、成長障害など精力的に取材していた。

B　アメリカの片足のない人が主人公だ。

C　Ｎスペ**「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」**。シリーズでやっていて3回終わった。

D　非常にいい企画だが、アニメ処理は疑問だ。大島渚が「敗者は映像を持たない」と言ったように、何かべつの方法があったのではないか。

A　若い人はあれでいいのかもしれないがあれが出てくるとげんなりする。

B　ＮＨＫのドキュメンタリーでよく空席のテーブルで会議を想像させていた。あの方がいい。

C　世評はどうなのだろう。「日本が戦争をしたのはしょうがないのだ」、「列強に戦争をさせられたのだ」という立場で見る人もいるのではないか。

D　ＮＨＫへの視聴者センターへの電話は右からも含め再放送希望が圧倒的だそうだ。

A　戦争に向かうにはいろんな要因があって、それを4回に分けて追って行くと日本国民は決して被害者だけではないということが浮かび上がってくる。

B　新聞は「行け、行け」と熱狂をあおりたてる、学校では天皇の御真影だし、熱狂が日常になっていた。そんな日常を含めての体験を若い世代にどう伝えるか、というところにこの番組の意味があった。その意味でアニメは若い世代に伝わる方法なのかもしれない。

C　非日常が日常だった時代だ。国民が熱狂して提灯行列をし、花電車が出たという映像だけではないものが欲しい。例えば隣組制度、郡長がいて長屋は監視制度でがんじがらめだし、防空演習にかりだされ、学校に行けば御真影と教練、それが日常だった。それを伝えたい。

D　何と言ってもやはりＮＨＫと大新聞だ。昭和12年頃までは新聞をとっている家は少なかった。支那事変以降爆発的に購読者が増えた。新聞社は戦争を謳歌することで儲かった。

A　問題は誰に伝えるかだ。戦争に突入して70年。やはり若い世代に伝えるのだ。番組を作っているのは、ＣＰが40代後半、あとは30代だ。私たちの世代が日清、日露の話を聞くのと同じくらいの年代の差の世代が番組を作っている。しかし彼らは現代のイラン、イラク、アフリカ各地など現代の戦争にはえらく詳しい。

B　Ｎスペのもう一つのシリーズ**「日本と朝鮮半島」**とこの「日本人はなぜ…」のの二つが若者を啓蒙する番組として実に要領を得ていた。

C　「日本人はなぜ…」の第4回は丸山真男がいう「無責任の体系」、誰が戦争を始めたのかの犯人探しになるらしい。近衛、東条、というのではなく、「ここで戦争をやっても負ける」という人はかなりいるのに会議になり、対ソビエトの陸軍、南進の海軍で分裂し、リードするものが不在。そうやって戦争に突っ込んだ。あれは何なのだろう。

D　最近、日仏学院でドレフュース事件と大逆事件の対比を講義した。大逆事件では反対意見が全く出ず、ドレフュース事件では反対意見が出た。それがふたつの事件の違いだ、という。

A　エミール・ゾラの「accuse(私は糾弾する)だ。

B　大逆事件にも徳富蘆花の「謀反論」はあったが、声が小さかった。

C　ＮＨＫが「日本人はなぜ…」をやった意味は大きい。開戦70年に因んでこれからもＮＨＫは続けるだろう。

D　前に「映像の記録」という番組があった。全世界のアーカイブからのもので、ＮＨＫから販売しているビデオの一番のロングセールだ。いまだに売れている。

A　**「無縁社会の衝撃」**。最近の作品だ。

B　これは放送の社会活動として意味があり、いなくなった老人の年金を受け取っている息子が出てくるかと思うと、最近の若者の孤立状態がでてきたりだ。

C　〝無縁社会〟という言葉をあれだけ流行らせ、菊池寛賞を受賞した功績は大きい。

D　朝日新聞は対抗して〝孤族〟という言葉を発明した。

A　ＮＨＫの番組だがスタッフは日テレで「ワーキングプア」を作ったチームだ。

B　**「法務大臣の決断」**は「永山則夫…」の堀川恵子さんの番組だが、タマが悪いとドキュメンタリーはいいものにならないという典型例だ。

C　撮るだけで相当の制約がある。長いインタビューの中に突っ込みが入れられない。堀川さんは不満だろう。「永山則夫…」からの3部作にしたかったのだろうが、この3作目は残念ながら弱い。

D　千葉景子より、短いけど宗教上の理由で死刑執行にサインしなかった佐藤恵の方が説得力があった。

A　**「シリーズ　日本と朝鮮半島」**5部作。なかなかの力作だ。Ｐは塩谷。

B　いままでに見られなかった映像が出てきた。非常に公平に作られている。

C　**「世界のドキュメンタリー、沖縄返還と密約～アメリカの対日外交戦略」**。ＮＨＫ・ＢＳの放送で土江真樹子さんの作品。堀川さん、土江さんとフリーの女性が活躍していることを評価したい。

D　この番組が密約問題の一番の核心をついている。この番組を見ていれば若泉敬の番組は変わっていたはずだ。地上波での放送でなくて注目されることが少なく不幸な番組だ。

A　**「田舎のコンビニ」**。これはいろいろ賞を貰った。日本放送大賞の準グランプリ、芸術祭優秀賞。

B　民放にあって地域問題を扱って10本近く積み重ねた最後の作品で、完成度も高い。主張もはっきりしている。

C　地方の優れた制作者たちは定年後ほとんど大学の教授に転身しているが、中崎さんは隣の局に行って番組を作り続けている。えらい。（笑い）

D　ある意味でフリーの立場で、女性がフリーで頑張っていることを強調したい。

A　非常に明るい作り方だ。しかし、地域社会が抱えている深刻な問題ははっきり出ていた。

B　**「ザ・ベストテレビ」**ＢＳ発足以来の傑作集は、ハイビジョンのこれまで30年の放送の中からの抜粋。民放が中央に送らない番組をＮＨＫがやる。

　発端は、「週刊ブックレビュー」のようにテレビ番組を批評する番組はできないか、との提案があったので「それでは面白くはない。それより民放の地方局でコンクールの賞を取った番組を放送したら」ということで「ザ・ベストテレビ」ができた。「ザ・ベストテレビ」は大きな意味がある。

C　**「密使　若泉敬　沖縄返還の代償」**。これは芸術祭の大賞。

D　アメリカのしたたかさは実によく出ていた。そして佐藤栄作をはじめとする政権の冷たさもよく描かれていた。

A　佐藤信二が密約書類が「机の抽斗にあったんですよ」とのほほんと言う。

B　ＥＴＶ特集でもう1本作っているが「安保に賛成する会」というのがある。外務次官をやった山井などが入っている会で、その中心に若泉がいる。この2本を合わせて見るとよくわかる。

C　東大法学部出身の土曜会。朝鮮戦争から高度成長まで日本のビューロクラシーがいかに日本の経済を打ち立てたか、大蔵官僚、外務官僚、農林中金、など象徴的な存在、密使なんてＣＩＡじゃあるまいし、と思ったがそうではなかった。堀田善衛の「広場の孤独」のような、政治、外交の歴史の中に揺れる人間像としての若泉が描けなかったものか。

D　報道の現場からみると若泉は軽蔑すべき人間にみえたが、こうして外交の波に翻弄される人間として描かれると「そうか。俺の知らない人生があったのか」と思う。結果として若泉は自分の愛国心が沖縄の状態を固定化したと思う。そして「他策なかりしと信ぜんと欲す」を書くのだが反響はなく、絶望して個人的な贖罪の旅に入る。若泉は最初は国際政治学者として現実の外交の機微に触れたかったのだろう。それで入っていって特使になったのだが、活躍した後思いが違ったと「他策なかりしを…」になる。

A　これは芸術祭の大賞だが、「玉砕」と「田舎のコンビニ」が最後まで残った。

B　ＥＴＶ特集**「敗戦とラジオ～放送はどう変わったのか」**。これは2回放送でなかなかよかった。「日曜娯楽版」がつぶれ、丸山鉄雄ががんばる話だ。

C　ディレクターの大森淳郎を買う。

村上雅通　ドキュメンタリーでＮスペの**「玉砕　隠された真実」**。これまでいろんな戦争の取材はしてきたが、アッツ島のこの経緯は全く知らなかった。最近ローカルに元気がなく、人と予算がカットされ、継続して取材する、番組を作ることが非常に困難になっている。あと個人の力量に頼るしかなくなっている。

B　ＮＨＫは一つの集団としてできるが民放の地方局はばらばらになってしまった。この2年間ですごいパワーダウンだ。

C　ＮＨＫの国際局は「民放地方局のいい作品を探して国際的に発信するのだ。そんなにお金は出せないが…」と張り切っている。「サカイ・タイゾー」（静岡放送）は１００か国で放送されたときく。

D　その種の入選作は衛星放送で必ず放送されるようになった。著作権の問題をクリアできればＮＨＫは利用価値がある。地域社会からの信頼を得るためにも良い作品を国際放送して欲しい。

村上　地方局は最近民教協の番組作りも敬遠するようになった。かつては１、５００万だった予算が今は５００万に減った。しかも制作局にセールスが義務付けられている。ＨＢＣなどは企画を出さなくなった。

A　事業仕分けの対象になると制作費総括の文科省はビビっているそうだ。

B　子どものころ大本営発表で「玉砕」という言葉を耳にして「玉砕って何だろう」と思った記憶が甦った。撤退は転進であり、全滅が玉砕だ。玉砕は漢詩がもとで軍歌「敵は幾万」に出てくる。散華は特攻隊で使われた。

C　戦死ではなく玉砕を使うことで戦死者を崇め、戦意高揚を図った。捕虜になって生き延びた兵士はもちろんいるが、その地の最高指揮官がいなくなると軍は見殺しにし「玉砕」と発表した。

D　最近**「失われた軍旗」**の再放送を見た。台湾からフィリピンへ行く途中潜水艦にやられて海中で軍旗を失い、フィリオインで他の部隊に「あいつらは軍旗を持っていない」と軽蔑される話だ。

A　乃木希典は軍旗を失って切腹しようとし、明治天皇に助けられた。

B　**「封印された原爆報告書」**はよくできた作品だった。終戦特番だ。

C　**「色つきの悪夢～カラーでよみがえる第2次世界大戦」**。これも終戦特番で評判になった。

D　新しい技術でモノクロの映像に比較的簡単に色がつけられる。迫力がちがう。

A　ＥＴＶ特集**「なぜ希望は消えた～あるコメ農家と霞が関」**。これは戦後農政について当時の農林省幹部に取材し、こ

座談会の模様

んな形の戦後農政の破綻をえぐる番組は初めてだろう。

B　主人公の農家の男は東北大学へ行って論文を書き、一方農村はどんどん行き詰まってっていく。

C　農政の問題は減反とか株式会社導入とかのレベルを超えた日本列島全体、農村民俗を含むまるごとの問題で、この番組はそんな視点で迫る姿勢がある。

D　制作は久保健一、制作統括が矢吹寿秀。

A　民主党政権になって農政が変わる。所得補償方式は崩れて株式会社が復活するかもしれない。株式会社がなぜうまくいかないかも克明にこの番組は描いていた。

B　**「鴎外の恋人～120年後の真実」**今野勉。映像で綴る評伝ドキュメンタリーの分野があっていいと思うが、映像作品としてこれでいいのか。

C　残されたモノグラムから謎を解明し、留学生森林太郎と少女アンナ・ベルタ・ルイーゼ・ヴィーゲルト一家と父親の履歴まで明らかにしたのは初めてだろう。文学史上の宿題を解いた功績は大きい。

D　金子みすずもそうで、評伝は今野勉が開発した領域だ。ドキュメンタリーでもドラマでもなく、文化的土壌の中で番組を作ることを評価したい。

A　金子みすずの本の前半は父親の家系をたどるマニヤックな調査報告だ。そのためみすずの閉ざされた世界が見える。後半彼女の詩にみる浄土的世界について書かれるが、そこで前半の記述が生きてくる。しかし、これらは作家としての今野勉の話だ。

B　いや作家であることは重要だ。番組限りでやっていたら放送の枠を超えることができない。ワーキングプア、無縁社会などいろんな問題を放送がリードして政治が動く時代だ。放送人が放送の枠の中だけで仕事をし仲間内議論をしていていい時代ではない。枠を破るべきだ。

C　しかし、今野勉がこれまで作ってきた番組の中ではブッキッシュな興味は認めるがやはり放送として面白くあって欲しい。

D　いや、私には面白かった。これからのデジタル時代は多様な世代、階層への多様な番組が求められ、これまでの箱を重ねる編成の形は崩れるのではないか。だからもっと難解な番組、もっと少数者対象の番組が出てくるだろう。つまり関心がないから見ないということではない。

C　それに反対はしない。そのためにも面白いものを作って欲しい。

B　面白いものとは何だ？

C　切迫感だろう。現代の人間に鴎外の恋人を明らかにすることがどれほどの意味があるかだ。

B　あの番組でも視聴率2～3％はあっただろう。放送にはこれは見ない、拒否というものはない。これはどうだろう？だめだな、と思う番組はある。しかし、面白くないからだめだという発想はやめた方がいい。

C　しかし、今野勉はテレビの中で新しい発想、新しい手法で番組を作ってきた人だ。村木良彦は放送のジャンル分けに異議をとなえ「番組という枠はおかしい。タブローの中に番組を押し込める発想はおかしい」と言った。

D　関心事は人によって異なる。私には金子みすずは面白かったが、森鴎外の恋人には関心がない。番組の作りかたには興味を持ったが、鴎外に対する私の関心と今野勉の関心には大きな落差がある。

A　この話は打ち切ってあとでやろう。**「アフガニスタン　永久支援のために～中村哲　次世代へのプロジェクト」**。

B　中村哲ほど平和問題に貢献している人はいないと思う。

C　「平和構築」という素晴らしい本が岩波新書から出ている。

D　歴史はねむらない**「沖縄・日本400年」**。ETVで、朝鮮と同様の通史を描いている。4回放送で全部見ると「ああ沖縄とはこんなところか」という感動があった。

A　ETVにもう1本大森淳郎の**「深く掘れ己れの胸中の泉」**を付け加えたい。これは尹波普猶と中曽根政善による失われてゆくウチナーグチの歴史だ。

B　これも「沖縄・日本400年」も大森淳郎で、実に面白かった。尹波普猶は「おもろさうし」研究の草分け、中曽根政善はその後継者。中曽根政善はひめゆり部隊の6人と3発の手榴弾で自決しようとしたが、隊員の一人が「もう一度お母さんに会いたい」と言ってはっと思いとどまり自決をやめたという。

C　尹波普猶は戦争中研究をやめさせられ、戦後間もなく亡くなる。それを中曽根さんが引き継ぎ、60年代まで研究を続け、今は沖縄芸大の先生が引き継いでいる。

D　独特の朗読があり、唄もうまい。

A　「おもろさうし」は宮中の歌会始めに似た抑揚でうたわれる。言葉は全くわからない。

B　日本の民俗学の範囲では沖縄はわからない。海の向こうから来たニラカナイの海洋民俗がある。

C　島尾敏雄はミクロネシア、ポリネシア、メラネシアにつながるヤポネシアがあると幻想する。そう考えれば沖縄の手がかりがつかめる。

D　沖縄独立論は1960年代の終わり、返還直前にあった。「思想の科学」の森秀人は沖縄の新聞からいろんな投稿、論文を拾って仮説独立論を述べた。

C　返還後、突然日の丸でいいのかという疑問も生まれた。

D　NHKのドキュメンタリーシリーズ**「灼熱アジア」**を推薦したい。何本もやっていてまだ続くが、ちょっと紹介すると、タイに進出した日本企業が失敗し、

座談会の模様

タイの企業に買収されて子会社になった、また、中国に進出しようとすると韓国との競争になる、これらの話を克明に追っている。貴重な番組だと思う。

A　あらゆる地域に中国が進出している。それがよくわかる。

B　２０１０年がどんな年だったかを考えると、まずＮＨＫ釧路放送局が昨年５月に放送した「国後」が思い浮かぶ。この番組が放送されるまで国後がどうなっているか日本のマスコミは全く音なしだった。日本人の取材が直接国後に入ることはできないのでロシア人に取材を依頼した。映像を見るとかつては想像もできなかったような夢の国になっている。短い番組の中で「プーチンは石油で儲けたお金を大量につぎ込んで、港を作り、観光客を呼んでいる」と言っている。かつて国後のロシア人に世論調査をすると、ほとんどが「日本へ行きたい」との答えだった。

　北方領土、尖閣列島、北朝鮮と菅政権には領土問題と外交問題が目白押しだが、そのきっかけの衝撃度は大きい。

　ロシアは戦略的にも、観光的にも国後、択捉を重視し、ロシアにとってのハワイにしようと計画している。そのことを日本のジャーナリズムは全く知らなかったのだ。これを見て外務省を含めて大騒ぎになった。

C　民放のドキュメンタリーを少し挙げたい。東海テレビ「**平成のジレンマ**」は戸塚ヨットスクールのこと。ＣＢＣ「**笑ってさよなら**」。富山テレビ「**不可解な事実**」は虫が魚を食う気持ちの悪い話。中京テレビ「**寝たきりアパート**」は胃瘻して寝たきりの老人だけを預かるアパートの話。アパートの経営者が病院と契約していて、医者が定期的に胃瘻の栄養補給に来る。部屋にはベッドだけでトイレも洗面所もない。音もない。

D　生活保護費を収奪する構造とはいわば老人収容所で、克明に撮っていた。

【バラエティー】

A　バラエティーでは「**ぶらタモリ**」。「**猫のしっぽ**」ベニシアさんなどがあるが…

B　ベニシアさんは不思議な人で、イギリスの大貴族。里帰りすると大きなお城に住んでいる。番組やタレントというのを越えて人間存在としての面白さだ。

C　京都、大原に住んで広い敷地にイギリス庭園を造り、花やハーブを育てている。

D　「ぶらタモリ」はさりげなく散歩しているようだが準備、下調べ、取材相手への依頼などが行き届いて敬服した。資料の地図、過去と現在のＣＧも凄い。

A　かつての今和次郎の「考現学」に似て「テレビ考現学」だ。

C　爆笑問題の「**日本の教養**」。これも面白いけど、太田はややうるさい。

D　「ぶらタモリ」の世界版で「**世界街歩き**」が意外に面白い。カメラがずっと回しっぱなしの感じで、ナレーションはタレントのアフレコだが、カメラの眼になって語っている。

A　カメラは蕎麦屋の岡持ちのようなカメラで狭い路地でも止まらずに入って行く。インタビューアーはない。

B　池上彰はもういいかな。ただ選挙特番をテレビ東京でやったのは抜群だった。最近のアフリカ特集も素晴らしい。

C　本来、あれがテレビキャスターの姿なのだ。ＮＨＫはどうして手放したのだろう。（笑い）ただ、ＮＨＫではあの放し飼いの感じではやれないだろうが。

D　放送人グランプリは励ますことが目的で、池上彰は既にテレビを卒業している。

【ラジオ】

A　ラジオでは青森放送、渡辺英彦の高橋竹山生誕１００年「**故郷の空に**」を推薦したい。二つあって、一つはあの津軽三味線の竹山が故郷の集まりでは小唄、端唄をやっている。このテープが残っていて見事。もう一つは竹山は目が見えないので「〇月〇日〇〇ホール」、とスケジュールを自分の声で録音した膨大なテープが残っている。60歳から２０００回公演をしたことを、このテープを聞きながら当時の関係者の話を聞いている。

　渡辺英彦はこれまで「太宰治と寺山修二」など優れたドラマを作ってきた。

B　芸術祭の時は構成の須藤氏が出席していた。須藤氏は青森弁の「まるめろ」の詩人高木恭三の番組を作った人だ。

C　ラジオはパーソナリティー以外に番組を作っている誰かを選びたい。

D　宮崎放送「**口蹄疫発生から終息宣言まで**」。これはギャラクシー賞に報道活動部門があり、そこで推奨された。

A　東北放送がタクシー会社と組んで、運転手視線から描いた週１回、15分読み切りのシリーズドラマ「**バックミラーの顔**」はなかなかいい。制作は鈴木俊樹。

B　日経ラジオ「**いのちみつめてスペシャル今日は死亡予定日**」はまあまあのヒューマンドラマ。

C　全体像をみて補遺を拾うと、年末スペシャル・ドキュメンタリー「**私たちの時代**」。Ｐは横山隆晴。

D　あれってドキュメンタリーというよりいわば系列の石川テレビの素材にからめた横山流「ドラマ」だろう。

A　以上統一感に欠ける憾みが残るが、２０１０年度の話題番組や関わった現場にも触れて進めた。もちろん会員皆さんには独自の見解があり、とらわれずに一票を投じていただきたい。

　投票締め切りは３月末。

　この座談会は３月４日（金）午後３時～７時に行われた。出席は石井彰、伊藤雅浩、隈部紀生、河野尚之、鈴木典之、藤久ミネ、堀川とんこう、松尾羊一、書面参加として渡辺紘史。加えて上京中の村上雅通さんが特別参加した。

座談会の模様

第29回・名作の舞台裏

6羽のかもめ

（フジテレビ74～75年　26回放送）

日時・2月26日（土）午後1時半～

場所・横浜情文ホール

ゲスト・嶋田親一（プロデューサー）

倉本聡（脚本）

淡島千景（出演）

司会・石橋冠（放送人の会幹事）

♪港で生まれて港で死んだ白いカモメを知ってるかい（中略）青い空と青い海がどこまでも広がっているよ　もっと遠くへ飛んでゆけ　海の向こうの見知らぬ港まで　ラララララララ…

加藤登紀子のブログによれば倉本さんが電話で「カモメってやつは情けない鳥でね。高く飛んだり遠くへ飛んだりしないんです。港のゴミゴミした辺りで残飯なんかを漁ってね、一生を終えてしまうヤツばっかり。そんなさえない鳥への愛しさがアナタのファドみたいな懐かしい感じで」と主題歌を依頼したという。一見派手に舞う鴎にテレビ局や俳優たちをなぞらえた主題歌。「七人の刑事」や「木枯らし紋次郎」もそうだが、昔は主題歌が良かったと休憩時間にロビーで語り合うご婦人たち…。

「かもめ挽歌」と鴎の群れが飛翔するタイトルで伝説のドラマが「舞台裏」に帰ってきた。

司会「それにしてもテレビ局の内側を舞台にしたドラマなんてどの局も考えつかない企画だが、どうして？」

嶋田「フジは制作分離体制で私も《新制作》という子会社をまかされ、企画を求められていた。大河ドラマ降板事件で北海道に身を隠した倉本さんの出番だ。〝社長判断〟で手付金50万円を金庫から出して垣内さんと夜行便で飛んだ。ところが倉本さん、首を縦に振らない。さあ困った」

倉本聡さん

倉本「NHKのことがあって、作家をやめ、タクシーの運転手でもやるかと声をかけたら運転手が北海道は土建や運送業だ、大型免許でなきゃって。で、大型を取ろうと学校へ通うつもりだったんです（笑い）」

嶋田親一さん

嶋田「毎晩薄野で飲んで（笑い）しばらくして企画書が出ました」

司会「局内のインサイド物語、内容が内容だけによくOKを出せましたね」

嶋田「低迷期のフジでした。意表をついた異色作、NHKともめた倉本の復帰第一作！これで行こう」（笑い）

司会「初期は石川俊子と共作ですが、石川さんとはどんな人で？」

倉本「あれはぼくのもう一つのペンネーム。台本でまだNHKと関係があったので倉本じゃまずい。渡哲也（勝海舟）の奥さんの結婚前の名前。（笑い）

当時、文学座などが分裂し、《雲》や《円》《欅》などに枝分かれした。小劇団《かもめ座》の背景です」

マネージャーで東洋テレビ局を舞台に悪戦苦闘する加東大介、座長が淡島千景以下高橋英樹、座付作者長門裕之などなど。彼らは局に近いマンションに居住し、稽古場をもち、たまり場が1階の喫茶店で「昔、ブクロにオレの女がいてね…」とパイプをくゆらすディック・ミネの店主に開口一番「困っちゃうんだよなあ、チミ」が口癖の中条静夫制作局長のもとで起こるモメ線にからむのが制作部の中原（蜷川幸雄）や矢田稔たち。加東＋夏純子らの劇団描写からテレビ局の内実が業界では話題になった。そのうちモデル探しが始まり、アイツは何某、軟派重役はアレだ。「大きなウソはついても小さなウソはつくな」の威力は大きい。小さなウソにひそむかなしい真実。

司会「ドラマの比重がテレビ局に行きがちで淡島さんの大山もえ子が代表して抗議したとか聞きましたが」

淡島「そんなことってあったかしら（笑い）いえ、あの本は6羽の全員が主役だったんで、今回は誰の話と毎回のホンを楽しみにしていましたよ」

淡島千景さん

上映した「電気乾燥機」と最終回の「さらばテレビジョン」は傑作だ。決して古くない。「今にして思えば、あのころのテレビは面白かったなどと言うな。お前らにそれを言う資格はない。懐かしむ資格のあるやつはあの頃懸命にあの状況の中でテレビを愛し、闘ったやつ。それから視聴者…楽しんでいた人々」と指さしてテレビを論難する山崎努の、長い台詞に場内は静まり返っていた。長い拍手の中に「舞台裏」は終わった。

記・松尾羊一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

災害地から緊急報告

山縣昭彦（俳号・ぽん太）

3月11日、当地に震度6度強の地震。老生は家人共々無事。周辺日本瓦の家屋は悉く屋根損傷。鹿島アントラーズのサッカースタジアムも損傷。霞ヶ浦の陪湖北浦に架かる行方（なめかた）大橋は崩落。走行中のクルマ数台が落下。

太平洋に面する平地部の家屋田畑は、防波堤を越えた海水で概ね浸水。鹿島港周辺は液状化が進み、船舶、クルマなど転覆、横転のまま放置されている。

当鹿嶋市は住友金属、三菱化成など企業80社の城下町だが、工業用水全面ストップのため、いずれも再開の目途が立っていない。ユニクロは火事で全焼。

メディア関係ではコミュニティーのラジオのFMかしまが出力アップしたが、放送内容にNHKラジオ以上の情報は無い。新聞は13日に配達再開したが、ガソリン枯渇のため、以後配達不能を覚悟せよとのお達し。地元の茨城新聞は印刷所被害で減ページ発行。

老生通院中のクリニックは14日、時間限定で再開。スタッフは90パーセントが被災者。また福島原発事故の放射線汚染影響下にあり、エアコンは停止中である。

以上3月16日現在の状況。

（茨城県鹿嶋市武井・在住）

ラジオのページ　その4

「ラジオの原点・効果音」

武本宏一

テレビニュースを見ていると、JALの尾翼に、この4月から、あの鶴丸マークが復活するという。

突如私の脳裏に浮かんだのは、キーンという金属音、コックピットでの英語の交信音、そして流麗なテーマ曲〝ミスター・ロンリー〟、そう、城達也さんの端正なナレーションが見事なFM東京の長寿番組「ジェット・ストリーム」のオープニングだ。

同番組は既に放送開始後45年にも及ぶ名番組だが、ラジオでは昔から、効果音を巧みに生かしたオープニングで惹きつけるレギュラー番組が少なからずあった。

戦後の民放ラジオでは、ラジオ関東の深夜、ビリー・ボーン楽団の「浪路はるかに」に乗ってむせび泣いた汽船の汽笛の響き。いかにもミナトヨコハマの局らしい、潮の匂いがした。

「ポート・ジョッキー」…。あの名アナだったケン田島さんは、まだご健在である。

ラジオの原点は、音。このごく単純な音の魅力を生かした番組が近頃少ない。

藤倉修一さん司会のNHK「二十の扉」。あれだって、初めの〝トントン・ギー〟という効果音を耳にするや否や、幼い知的好奇心が怪しく刺戟されたものだ。

さて、それから数十年、私自身が、効果音入りのオープニング作成に七転八倒する時がきた。

私がFMラジオ番組のディレクターをつとめていた、1980年代の半ば、FM東京から依頼があり、当代随一の人気作家五木寛之氏出演の、夜のレギュラー番組を企画することになった。

早速五木さんにお会いすると、氏は開口一番、

「ほら、汽笛とかジェット機とか、効果音の効いたオープニングがあるでしょう。こちらも何か印象的な音で始めましょうよ」

勿論、我が意を得たり。

たまたまその番組は、ラジオでの仮想空間である〝ペントハウス〟に、毎回一人天下の美女をお招きして、五木さんがじっくりお話を聞こう、という内容に固まったので、

「じゃあ、こちらはクルマでいきますか」

「そりゃいい。高級車がやって来て、女性の靴音が下り立って、そうそうテーマ曲は〝レフト・アローン〟がいいな、マル・ウォルドロンの…」

じゃ、早速…と、その高級車のエンジン音を録音する段になって、私はハタと窮した。もう第1回目の録音は数日後に迫っている。クルマはどうする。

止むなく私は手近なところで、ポンコツ寸前の私の愛車スカイラインの音を録って、五木さんに聴いてもらうと、

「……」、案の定のしかめっ面だ。「仕方ない。駐車場で、私のクルマを録ってみて下さい」

急いで駆けつけたそこにデンと座っていたのは、何とあの007が疾駆させる超高級車、アストン・マーチンではないか。想像を絶する重低音…、まいった。

すっかり五木ペースにはめられてしまったが、お蔭でなんとも贅沢なオープニングが完成、第1回目の天下の国際女優、岸恵子さんを笑顔でお迎え出来た。

さて、平成23年のいま、ウーンと唸らされる効果音入りの番組ありませんか。

遺稿

故・吉村光夫さんの奥様から左記のお手紙を頂きました。

夫の机の上のワープロに打ち残されたままになっておりました文章は、暮れにそちら様からご依頼のあったものと思い、ご連絡した次第です。

ほんの文章の始まりのように思われます。また途中の空白のところに何が入るかわかりません。

生前はいろいろお世話になりました。横浜のスタジオ（情文ホール）には何度か伺いましたことを思い出しております。

放送人の会のますますのご発展をお祈りします。

有難うございました。　吉村　康子

昨今はNHKが大ハッスル

吉村　光夫

思えば日本の民放草分け時代、私は人生を始めたことになる。60年前の秋、名古屋で中部日本放送が、大阪で新日本放送が、冬になって東京でラジオ東京という会社が民間放送を始めたのだ。大学を出たての私にNHKの求人広告が目にとまり、受けたら難関突破、都落ち。鹿児島放送局の独身寮でのアナウンサー生活は有意義で楽しかったが、父が「友人の王子製紙社長足立正さんがラジオ東京の初代社長になった。転職のため上京せよ」と。職種は同じアナウンサーだ。

このラジオ東京が今のTBSで、開業当初は3M、つまり毎日新聞、満州電電、ムーランルージュの関係者が社員として顔を利かせており、NHK出身など小さくなっていた。

4年後に民放もテレビを始め、1960年にはカラー化、社名を東京放送TBSと改名したので、NHKものんびりしていられなくなったのではなかろうか。

大晦日には毎年銀座の服部時計台に上り「ゆく年来る年」の除夜の鐘をラジオで生の全国中継、NHKと張り合った。言うことは決まっていたが…。

NHKになかったのがテレビCMだ。三洋電気提供のテレビドラマで生CMを担当。ジャンパー姿はなかなか粋だったが、長い文章を覚えるのは地獄の沙汰。泉大助君が松下電器提供番組での同業者で、お互い日本の電機産業発展の陰の功労者かもしれない。

松下電器は1959年春に皇太子ご成婚放送を提供、私は二重橋広場でのお二人の馬車パレードの実況放送で「皇太子殿下明仁さん、皇太子妃美智子さん」と呼びかけたが、軽井沢のテニスコートで結ばれたお二人も平成天皇夫妻になられて23年、　無いと思う。

アナ生活14年の後、ラジオとテレビの送出現場管理職の8年間は忍耐の人生だったが、テレビ番組宣伝部に異動したら「制作費」を扱う生活が始まり出勤するのが楽しくなった。

第25回放送人句会

◇平成23年3月9日（水）　◇於…赤坂・麦屋
◇選者…星野高士
◇出席…伊藤視郎、上村暁蛙、荻野慶人、鈴木もんど、鶴橋康夫、豊田まつり、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、林備後、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、西川阿舟（15名）
◇兼題…水温む、椿、ロケ弁

【星野高士特選】

また一つ嘘見えてきて水温む　康夫
この奥の人の暮しや八重椿　康夫（◎慶、蛙、も、備、馬）
空に満ちる光りや藪に椿咲く　きよし（◎もん）
ロケ弁をかばいて食むも春疾風　治美
弁当は鰆の煮付け島のロケ　もとを（き、馬）
天地（あめつち）も喪明けなるらし水温む　もんど
巫女宿の背戸に白玉椿咲く　暁蛙
水温み佳き人の声渡り来ぬ　もとを（◎丈）

【星野高士選】

紅椿咲いて悲しき予感ふと　まつり
水温む多摩の河原に竿群れる　馬笑
足摺の椿や妻の若かりき　丈博（舟）
椿一輪ロシア娘の弾くショパン　暁蛙（慶、舟）
あやとりの子らに落ちたる花椿　丈博（◎もと、視、康、馬）
小諸より来たる絵手紙水温む　備後（と）
唐橋の先に落ちたる白椿　もとを（蛙、舟）
敵味方ロケ弁膝に梅見かな　慶人（丈）
春泥やロケ弁二丁抱え来て　視郎（ま）
揚雲雀ロケ弁当を開くより　視郎
ビルの陰それでも椿凛として　慶人
月光を地に活けてある玉椿　もとを（蛙、治）
つがひ鳥椿三つ四つ落としけり　暁蛙（き、と）
爛漫をなぜか恥らふ玉椿　馬笑
はや来たり別れのときよ水温む　治美
散歩路の我が影老いて水温む　丈博（◎治）
やり場なき怒りをよそに水温む　康夫（き、治）
ロケ弁に添へ消え物の蕗の薹　阿舟（ま、もと）
夕暮れの椿の下の逢瀬かな　視郎
又ひとり友垣くずれ水温む　慶人（丈博）
水温みゆきかふ肩のやはらかく　まつり（◎と）
心字池鯉動く色水温む　阿舟
内トラのロケ弁を食ふ土手の春　丈博
小康の妻のおしゃべり水温む　康夫（◎備、視）
夕闇をほのかに照らす白椿　治美
白椿紅椿水くぐり行く　視郎
水温む今朝川音のやわらぎて　とんこう（◎き）
落ち椿十歩のほどに眠る猫　きよし（◎馬）
一輪がこちら見ている紅椿　とんこう（◎ま、慶、丈）
紅椿玉砕のごと落ち敷けり　もんど（◎康）
落ちてなほ気品を持せる椿かな　もとを（慶）

【会員選】

落椿昨日の夢の赤のまま　きよし（◎視、◎蛙、丈）
ロケ弁を配り終へれば春の山　備後（視、もん、もと）
手足伸ぶ声伸ぶあした水温む　もんど（視）
ロケ弁の梅干固き寒さかな　きよし（蛙）
落椿数ふえており帰り路　とんこう（慶、もと、き）
椿落つ首なき土偶垂乳根に　康夫（もん）
句仲間も穴出でたるや水温む　備後（もん）
椿待つ角を曲がりて駅舎なり　治美（康）
水温む一丁がほどを駆け抜ける　馬笑（康）
ほんたうは騙されてをり水温む　まつり（康、備）
春雨じゃロケ弁バスでごゆるりと　慶人（ま）
水温み東西南北土俵際　慶人（備）
椿燃え御陵（みささぎ）の威やわらげり　もんど（と、舟）
落椿散り敷く朝の島ホテル　きよし（と、治）
絵の中のふるさとの山椿咲く　丈博（馬）

【選者吟】　高士

人間に背骨のありて玉椿　（ま、もと）
ロケ弁の隅に菠薐草威張る　（治美）
魂は色を持たざり水温む　（◎舟、備）
一舟を追ふ舟もなし水温む
ロケ弁の蓋置くところ落椿

【選者名　視＝視郎、蛙＝暁蛙、慶＝慶人、もん＝もんど、康＝康夫、ま＝まつり、丈＝丈博、もと＝もとを、き＝きよし、備＝備後、と＝とんこう、馬＝馬笑、治＝治美、舟＝阿舟**】**

次回放送人句会

◇5月11日（水）18：30頃～
◇於…赤坂・麦屋（Fax　03・3586・0056）
◇兼題…更衣、薔薇、打上げ（夏の季語を入れて）

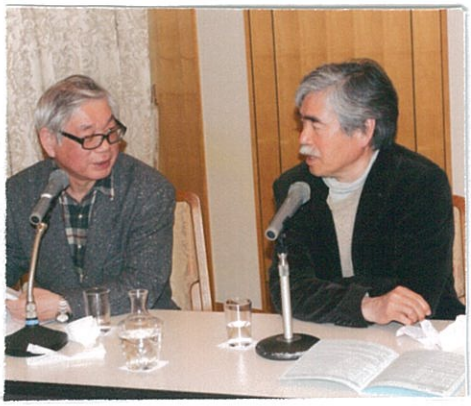
第13回「放送人の世界」

曽根英二・人と作品

第13回の「放送人の世界」は、曽根英二さんで、3月18日（金）、3月25日（金）の2回に分けて行われるが、ここでは18日の分だけの報告である。

18日はまだ計画停電の実施中、「不用不急の外出はお控えください」と広報車に言われながら青山荘に到着すると、やはり参加者は少なく、10数名。全員放送人の会会員であった。

曽根「皆さんもそうだと思いますが、未曾有の災害で心がざわざわしています。かつてカイロ特派員でいたとき、なぜエジプトの民衆は闘わないのかと思いました。いまやっと民衆革命が起きました。豊島も取材を始めたときはこんなになるとは思っていませんでした。こんなにも闘う住民がいる、こんなにも住民の方を向こうとしない行政がある、地方に課せられた理不尽を伝えて20年経ちました。」



上映したのは豊島のドキュメンタリー「豊の島のゴミ騒動」「泣き寝入りさせまへん」「ゴミの島の民主主義」そして「島の墓標」である。いずれも地方の時代映像祭賞、民放連賞を受賞している。

豊島にゴミがやって来るのは1990年。「島の土を関西空港建設に使う、そのあとに建築廃材を入れる、その上にリゾートホテルを建てる、島は豊かになる」と言われて島民は土地を手放し、漁協も協力金を受け取って合意した。しかしやって来たのはトラック1、500台分のゴミを積んだ船だった。島の中はゴミを積んだダンプカーが走り回り、「豊島やのうてゴミの島や」と言われるようになる。もちろんリゾートホテル建設の話は消え、3年半で島の形が変わった。ゴミは2年間で10万トン、全部で30万トンまで受け入れる計画だったが、あっと言う間に50万トンが廃棄される。

取材の中で事件がはじけ、住民が立ち上がって行く姿を曽根作品ははっきり記録している。そしてついに住民の味方に中坊公平弁護士が立つ。「何故弱者がここまで苛められなければならないのか。泣くだけ泣いて寝入ってしもうてはあかん」。ゴミを島で中間処理して無害化し、けじめをつけよう、との交渉が始まる。行政は全く住民の側を向こうとはしない。若者たちは島から出て行き、島は高齢化が進んでいる。激しい口調で県議に抗議する高齢のムメさん、ハマチ養殖業のリーダーで丸顔のリーダー安岐正三さんなど、魅力的な顔が記録される。そして島は思い余って県議選に石井亨さんを候補者を立てる。苦戦を予想されたが僅差で逆転当選である。

97年、98年、交渉が進み、やっと中間合意に至る。闘いの中で高齢の住民は一人、二人と亡くなって行く。島の葬儀には古風な伝統が残っているが、リーダーの一人の葬儀に集まるおばあさんたちの表情をカメラは静かにとらえている。涙をこらえる表情を撮るカメラマンも涙を必死にこらえているようだ。

曽根「インタビューはさしの勝負だと思っています。事前にはいろいろ考え計算しますが、相手の目をまっすぐ見つめて喋ります。豊島の人は私もカメラマンも顔を全部覚えてしまいました。ムメさんには『あんたは通訳じゃ』と言われましたが、味方と思っていましたね」

住民側はついに勝ち、ふてぶてしかった県知事が謝罪する。喜ぶ住民たちの表情は観る者にも嬉しい。

今野「曽根さんの文章は『限界集落』を読むとわかりますが飾りのないストレートな名文です。無機質ではなく、必要なもの伝えたいもの、美しいものだけを書こうとしている文章です」

上映された作品はゴミの島を追いながら、常に瀬戸内海の美しい風景と古い民俗をいとおしむように記録している。

青山荘の数少ない参加者は古い友達への長い拍手を送っていた。

訃報

守分寿男さん

10年12月27日硬膜下出欠のため亡くなられました。享年76

守分さんは大分県竹田市生まれ。57年HBC入社。主に東芝日曜劇場」枠で倉本聰脚本で「ばんえい」「うちのホンカン」「幻の町」「あかねの空」などの傑作を作り、最後の作品は小樽商科大学創立百周年記念ドキュメンタリー「いのちの記憶～小林多喜二・29歳の人生」でした。著書に「さらば卓袱台～テレビドラマの風景」（かもがわ出版）

木村　栄文さん

1935年生まれ。3月22日、心不全にて逝去されました。享年76。木村さんは1959年RKB毎日に入社。代表作には「苦海浄土」（芸術祭大賞）「記者ありき」「鳳仙花」「むかし男ありけり」。02年紫綬褒章授章。映画「オールドディック」を監督。晩年作には、木村さんや川崎洋さんが師事した九州詩壇の雄丸山豊をめぐる評伝ドキュメンタリー「月白の道」がある。

編集後記

▼放送人グランプリのための座談会を掲載しましたが、ノミネートの締め切りぎりぎりのお届けになりました。ゆっくり読む時間がないとのお叱りを覚悟しています▼地震が起きたときは事務局にいました。積んである書類や本が落ちる、冷蔵庫の蓋が開いて中の物が飛び出す状態でしたが、壊れるなど事務局の被害はありませんでした▼1階のホールで津波の生中継を見、会館管理者の指示で1時間ほど様子をみてから佐藤真美子さんと一緒に歩いて帰宅しました▼佐藤さんは中野までで9時に到着。私は国分寺まで歩き、国分寺駅でタクシーを2時間待って帰宅。到着は午前4時。歩いた歩数は4万歩でした。**（視郎）**